

歴史人物誌

このコーナーでは、町にゆかりのある歴史人物とその結び付きなどをシリーズで紹介していきます。執筆者は町史編さん委員の佐藤仁志さん（豊間根・六八）です。

松本幸三は、安政元年（一八五四）松本六之助の次男として山田村に生まれた。漢字や数学を大久保直樹に学び、明治九年二十二歳の時、横浜灯台局に就職した。明治十三年、灯台局を辞め、単身北海道稚内村に赴いた。幸三は、漁業家小林忠吉に雇われ二年間働いた後、同十五年、同村

の有力な漁業家泉谷伊兵衛に雇われ、漁場取締となった。



松本幸三の活躍が紹介された「月刊道北（昭和53年2月号）」の写し

北海道尻白を開拓した

松本幸三

幸三は宗谷の尻白に漁場の許可を得、多くの人を雇い、泉谷と鮭漁をはじめ、同十六年の秋、初めての網は大漁、泉谷は鮭を売りさばくため函館に向かった。しかし、悪徳業者にひっかけり大損害、責任を感じた泉谷は函館に留まり帰らなかった。

翌十七年の春、三十歳の幸三は自ら奔走、資金を集め鮭漁に取り組み、この年大漁とな

り大きな収益を得た。幸三は泉谷に帰郷を促したが、彼は豊漁は一時的なもの、将来の見込みがないことを主張、幸三に実印を渡し、すべてを売却して負債を償却してほしいと委任された。幸三は、泉谷に関わる全責任を負い、泉谷の代理としてマシポイ、メクマ、フフカルの鮭漁場の権利を取得、豊漁に恵

まれ経済基盤を確保し、泉谷の帰宅を促し実印を返却した。この忠誠ぶりは村の話題になった。幸三は主家を守った恩賞として金百円と漁船二艘を貰い受け、初めて独立、明治二十一年尻白に漁場を構えた。尻白の地は人の住めるような場所ではなかった。幸三は土地を整備し、耕地をつくり、野菜、果物を栽培し、漁場の拡張につとめ、移民の勧誘、土着に努めた。

幸三は親分肌の漁業者で、尻白の殖産を志し、入地者の面倒をよく見、公共的な事業に尽力した。明治二十三年、増毛―稚内間電信架設の際、電柱を寄贈、宗谷警察署の新築にあたり、大工を提供、道路改修や橋梁架設に私費を投じた。明治二十七年稚内小学校尻白分校、宗谷分校新築に大金を寄付、巡查駐在所建設発起人代表としてこれを実現した。同二十八年小学校区学務委員に推され、同二十九年に尻白郵便局長に就任した。幸三は尻白（現在稚内市大岬）において、明治三十八年四月、五十一年の波瀾万丈の生涯を終えた。

町長室から

十月八日、山田高校で山田町を理解するためのパネルディスカッションが開催され出席しました。従来は「町長講話」の形で一方通行であったものを見直し、事前に生徒から「山田町について知りたいことは何か」とのアンケートを取り、それらを代表の生徒がわたしに質問する形で進められました。

その内容は▼山田病院の診療科が少ない理由▼下水道の整備が進まない理由など公共事業について▼福祉問題▼防災対策▼町の活性化対策――など盛りだくさんでした。わたしは改めて、生徒たちが真剣に山田町の将来のことを考えていることに感動いたしました。

後日いただいた生徒たちの感想の中に、「これから面接試験で、今日教えられた山田の魅力や自信を持って言おうと思う」「私たちもアイデアを出してより良い山田を創ろう」とありました。

山田町長 沼崎喜一